

## 佐賀県研究成果情報（作成 2026 年 2 月）

**[情報名]** シンテッポウユリの据え置き栽培は4月上旬に切り戻すことで切り花品質および採花本数が向上し、所得が高くなる

**[要約]** シンテッポウユリの中生品種における据え置き栽培では、前作の球根から萌芽した茎部を切り戻すことで再萌芽株の切り花品質が向上する。また、切り戻し時期は4月上旬が適しており、輪数は高単価な3輪程度となり、採花本数が向上し、所得が高くなる。さらに切り戻し作業は定植作業よりも省力的である。

**[キーワード]** シンテッポウユリ、据え置き栽培、切り戻し、露地栽培、省力

**[担当]** 佐賀県農業試験研究センター 野菜・花き部 花き研究担当

**[連絡先]** 0952-45-2143・nougyoushikensenta@pref.saga.lg.jp

**[分類]** 普及

**[部会名]** 花き

**[専門]** 栽培

### [背景・ねらい]

シンテッポウユリは初期投資の少ない露地花き品目として有望であるが、より一層の普及を図るためには、管理作業の省力化と高単価販売のための高品質生産が重要である。前作の球根を活用した据え置き栽培は定植作業を省力化できるものの、草勢が強く、切り花が過大に伸長するなど、切り花品質が低下する傾向にある。

そこで切り花品質の向上や採花本数の増加と定植作業の省力化を目的とし、据え置き栽培における適切な切り戻し時期と切り戻しの省力性を明らかにする。

### [成果の内容]

1. 中生品種を用いたシンテッポウユリの据え置き栽培は、前作の球根から萌芽した茎部を切り戻すことにより、再萌芽株の切り花長、切り花重および茎径を適切な規格に制御でき、切り花品質が向上する。特に4月上旬に切り戻すと慣行と同程度の切り花品質となる（表1、図1）。
2. 輪数は、4月上旬および4月中旬に切り戻すと高単価で販売される2～3輪となる（表1）。
3. 4月上旬に切り戻すことで1株当たりの再萌芽本数が高くなり、採花本数が無処理より多くなる（表1、表2）。
4. 所得は、4月上旬に切り戻すことで慣行より約1.3倍に高くなる（表2）。
5. 切り戻しにかかる作業時間は、定植した場合の2割程度であり、省力的である（図2）。

### [成果の活用面・留意点]

1. 本成果は、シンテッポウユリの露地栽培に活用できる。
2. 本成果は、中生品種「オーガスタ EX」を用いて試験を行った。
3. 採花日は、切り戻すことで後進し、収穫時期が分散化する。
4. 切り戻しは枝切ばさみ等を用いて、地上部5cm程度の高さで萌芽した茎部を切除する。切り戻し後は切り口からの病害の侵入リスクが高くなるため、殺菌剤を散布し、病害の発生予防に努める。
5. 据え置き栽培は基本的に無肥料での栽培が可能であるが、葉長が極端に短くなる場合、葉色を見ながら追肥を行う。
6. 冬期（据え置き時）は、葉枯れ病の予防のために定期防除を行う。また、除草などの雑草対策を講じる。

## [具体的なデータ]

表1 各切り戻し時期における収穫時の生育(2025年度)

研究年度	切り戻し時期	採花日	節数	切り花長 <sup>z</sup> (cm)	切り花重 (g)	茎径 (mm)	輪数 <sup>z</sup>	プラスチック <sup>g</sup>	90cm 調整重 (g)	再萌芽 株率 (%)	1株当たりの 再萌芽本数 (本)
2025	無処理	7月10日	145.6	207.8±15.0 a	427.7	11.0	6.5±1.1 a	0.3	180.1	-	-
	4月上旬	7月20日	65.8	120.3±19.8 b	159.6	7.8	3.3±2.0 b	0.1	114.5	90.4	1.6
	4月中旬	7月23日	53.6	104.3±14.3 c	107.5	7.2	2.1±1.0 c	0.1	97.6	76.7	1.5
	4月下旬	7月29日	51.5	90.7±16.2 d	80.2	6.7	1.6±0.8 c	0.0	93.7	62.6	1.5
	5月上旬	8月5日	49.8	80.3±12.2 e	73.6	6.7	1.4±2.4 c	0.2	-	25.0	1.2
	実生(慣行)	8月1日	45.8	118.6±12.7 b	143.5	8.4	3.6±1.4 b	0.5	107.0	-	-

<sup>z</sup>Tukeyの多重比較検定により異文字間に5%水準で有意差あり

### 【耕種概要】

○据え置き 切り戻し日：無処理(切り戻しなし)、4月上旬(2025年4月8日)、4月中旬(4月18日)、4月下旬(4月29日)、5月上旬(5月8日)

試験場所：農試露地圃場

供試材料：中生品種「オーガスタEX」の2年目の切り下球根

施肥：なし

定植(前作)：2024年4月16日

栽植密度(前作)：4条植(株間12cm×条間12cm)

○実生(慣行) 施肥：基肥(N、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>、K<sub>2</sub>O各2kg/a)、追肥(液肥を隔週散布)

定植：2025年4月24日

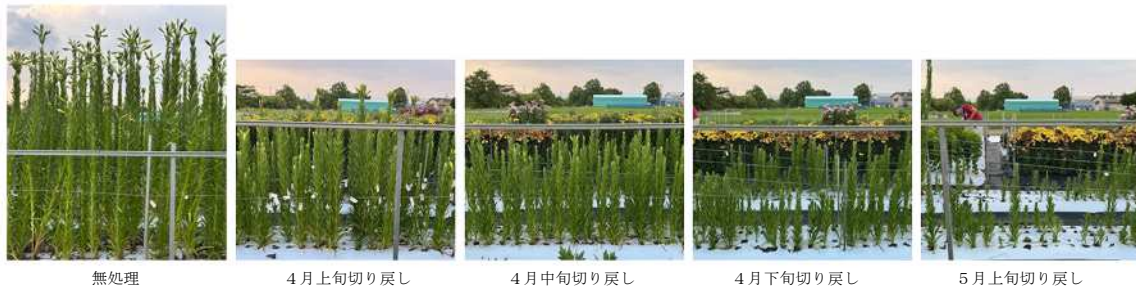


図1 収穫前の生育状況(2025年7月9日)

表2 1a当たりの収支試算

切り戻し時期	出荷本数 <sup>z</sup>	粗収益 <sup>y</sup> (円)	生産経費(円)				販売経費 (円)	所得(円) <sup>w</sup>
			種苗費	肥料費	農薬費	諸材料費 <sup>x</sup>		
無処理	2,037	151,078				24,945	118,649(108)	
4月上旬	2,424	179,781				29,684	142,613(130)	
4月中旬	2,025	150,188	0	0	1,100	6,384	117,906(107)	
4月下旬	1,634	121,189				20,010	93,695(85)	
5月上旬	511	37,899				6,258	24,157(22)	
実生(慣行)	2,131	158,065	14,438	3,200	1,100	6,384	109,847(100)	

<sup>z</sup>慣行栽培は1a当たりの定植本数を2664本、据え置き栽培は前作からの切り下球根の生存株数を1a当たり2131本(定植本数の8割)、出荷率80%として試算

<sup>y</sup>令和7年度平均単価74.2円(JAさが佐城地区販売実績)から試算

<sup>x</sup>フラワーネット、白黒マルチ、灌水チューブ等

<sup>w</sup>所得=粗収益-(生産経費+販売経費)

( )内は定植を100とした場合の対比

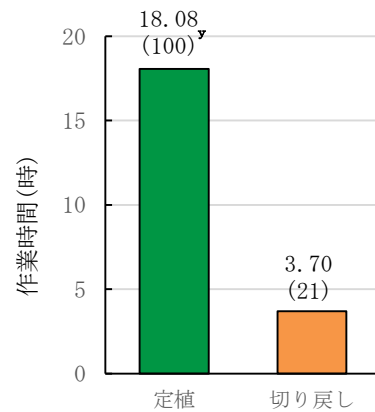


図2 1a当たりの定植および切り戻しに要した時間<sup>z</sup>

<sup>z</sup>作業人数は各4人で計測し、1a当たりの定植本数を2,350本として試算した。

<sup>y</sup>( )内は定植を100とした場合の対比

## [その他]

研究課題名：シンテッポウユリ等の夏秋期出荷品目の安定生産技術の確立と新品種育成

予算区分：県単

研究期間：2024～2025年度

研究担当者：松崎颯大、宮崎雄太、宮地知子

発表論文等：園芸学会令和8年度春季大会 ポスター発表